県中いわて

令和2年10月1日／第251号

●発行／岩手県中学校長会　●代表／菊池　正樹（盛岡市立厨川中学校）●事務局／〒020-0885 盛岡市紺屋町2-9（盛岡市勤労福祉会館2F）／電話・FAX 019(622)0572　●ホームページ https://www.iwate-jh-kochokai.jp/
●印刷／杜陵高速印刷／電話019(651)2110

絆（きずな）　東日本大震災津波　被災地訪問（宮古地区・久慈地区）被災校支援（ベルマーク教育助成財団より）

■被災地訪問

ここ数年、継続的に行われてきた全日本中学校長会役員による東日本大震災被災３県（岩手・宮城・福島）訪問及び被災地訪問は、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、本年度は見送られることとなりました。

そこで、県中学校長会として被災地訪問を行うこととし、該当の市町村教育委員会、地区校長会、学校等のご理解とご協力をいただきながら、８月に宮古地区・久慈地区の４校を訪問してきました。

概要を報告します。

１　趣　旨　東日本大震災被災地の視察による現状把握と今後の支援の在り方についての意見交流

２　期　日　令和２年８月６日（木）～７日（金）

３　訪問者　菊池会長　松葉総務部長
菅井研究調査部長　佐野行財政部長
藤岡生徒指導部長　鈴木広報部長
橋場特別常任理事（中体連）

４　現地対応者

○宮古地区校長会（８名）
伊茂野会長（宮古一）　菊地副会長（宮古西）
沼田校長（河南）　三浦校長（花輪）
照井校長（田老一）　佐々木校長（山田）
古里校長（小本）　石川校長（田野畑）

○久慈地区校長会（４名）
菊地会長（久慈）　小橋副会長（長内）
松村校長（三崎）　勝部校長（野田）

５　訪問の概要

◇山田町立山田中学校
・佐々木校長より説明
・校舎内施設見学
・隣接する学校給食センターの施設見学（箱山教育次長兼センター所長）
＊R2.4豊間根中と統合。
＊発災時生徒数536→本年度316。10年後も300名程度で推移の予測。
＊心のケア、人的支援は今後も必要。
＊新型コロナウイルス感染対応もあり他との交流は減。「風化」が心配。

山田中（佐々木校長による説明）

◇宮古市立田老第一中学校
・市教委から伊藤教育長様、小林学校教育課長様に同席いただく
・宮古地区校長会との意見交換会（復興の状況、コロナ対応等）
・照井校長より説明
・校舎内施設見学　琴畑用務員様による説明
＊教職員の異動。「つなげる意識」「つないでいくこと」の重要性を認識。
＊内陸との交流、節目発表の機会の継続を。
＊引き続き加配教員の措置を。

田老一中（会長挨拶）

田老一中（震災資料展示室）

◇岩泉町立小本中学校
・古里校長より説明
・校舎の施設見学（岩泉町指定避難場所）
　校舎内に防災備蓄倉庫を備える
＊H28.4 ～新校舎。
＊小学校と同一校舎での教育活動。
＊H28.8台風10号により学区に大きな被害。

小本中（古里校長による説明）

◇野田村立野田中学校
・久慈地区校長会との意見交換会
・勝部校長より説明
・校舎の施設見学と生徒の発表参観
＊コロナ対応の影響もあり、生徒活動の発表の機会・場が失われている。
＊教員が復興教育を学ぶ場の確保が課題。

野田中（３年生による野田中ソーラン）

野田中（久慈地区校長会との懇談）

■被災校支援

公益財団法人ベルマーク教育助成財団（東京都中央区）は、東日本大震災発生直後から継続して被災３県を中心に被災校の支援を行っています。

本年度も、被災地における教育活動困難を補ったり、姉妹校等との生徒間交流を図ったりするという復興支援の趣旨で、岩手県中学校長会へ200万円の「バス代支援」をいただきました。

対象となるのは４地区23校。１校当たり８万円が配分されます。残りの16万円を学校数等に応じて各地区に配分（１地区２～５万円）し、学校分の総額と合わせた額が各地区に送金されます。

対象校（４地区23校）	
【気仙地区】	高田一中　高田東中 大船渡・一中　大船渡中　末崎中 赤崎中　綾里中
【釜石地区】	釜石中　大平中　唐丹中 釜石東中　大槌学園　吉里吉里中
【宮古地区】	宮古・一中　宮古・二中　河南中 津軽石中　重茂中　田老一中 山田中　小本中　田野畑中
【久慈地区】	野田中

昨年度も、４地区24校（本年度越喜来中が大船渡・第一中に統合）に200万円の支援が行われました。１校当たり８万円を基本に配分され、他校との交流をはじめとするさまざまな教育活動に活用されました。

県中学校長会では支援金を活用した活動の状況について、毎年財団への報告を行っています。

高田東中（２年学習旅行／盛岡市）

赤崎中（３年防災学習／津波伝承館）

他の学校も含めた活動の様子はベルマーク教育助成財団ホームページに掲載されています。

先輩メッセージ

地名の話

中田　隆一　様
（前岩手町立一方井中学校長）

私たちが若い頃は、職場の親交を深めるため、研修旅行がありました。ある学校に勤めていた時、津軽地方の旅に出掛けました。旅の途中、十三湊で名物のしじみラーメンをすすっていると、校長先生が私に尋ねられました。「中田君、ここの十三（とさ）湊と高知の土佐港は、何か関係があるのかな？」と。その時は、うやむやな答えしか言えませんでしたが、そこから私の「地名への旅」が始まりました。

色々調べていくと、北海道と北東北の間に、共通する地名があることが分かりました。例えば北海道の「宿野辺」と岩手の「宿戸」、北海道の「釜屋」と青森の「釜屋」等です。これらは、金田一京助先生によると、アイヌ語に由来する地名で、アイヌ語の「シュプン・オ・ベ」は、「石斑魚が・いる・川」、「カマ・ヤ」は、「扁平の岩がある・岸」という意味になります。また、盛岡の古い地名の中にも、アイヌ語由来と推測できる地名が残っていることが分かりました。盛岡駅前の「木伏」＝「キ・ウシ・イ」＝「茅が・群生する・所」、「不来方＝「コッ・カ・タイ」＝「窪地の・上の・森」、「米内」＝「イオ・ナイ」＝「それ（蛇）が・いる・川」、そして、そば処東家本店付近の「斗米」＝「ト・コッ・ベッ」＝「沼の・窪地の・川」と、解釈できそうです。岩手にアイヌ語地名が見られることについて、「岩手民衆史発掘（八木光則氏著）」によると、『アイヌ地名でもっとも一般的なのは「ナイ」と「ベツ」を語尾につける地名だ。（略）ナイ、ベツの形成は、いずれも縄文時代にさかのぼるとみられる。』と述べています。

…あの頃、もう少し勉強していたら、『校長先生、十三湊と土佐についてですが、縄文時代由来の古い地名が、四国の端の高知と、東北の端の青森に残っていて、その意味はどちらも、「ト・サム」＝「湖の・ほとり」という意味になるらしいです。』と答えることができていたのかもしれません…。

先輩メッセージ

教職員の心とは「密」の関係でありたい

柿崎　肇　様
（前北上市立江釣子中学校長）

終息の見えないコロナ禍の中にあって、各校の校長先生方は、大変な思いで学校経営をされていることでしょう。このような危機だからこそ、今まで以上に職場の皆さんと心を合わせ、同じ思いで業務ができるようにと工夫されていることかと思います。

コロナ禍以前の私も、まずは一日の始まりとして主任同士が同じ思いで仕事をしようと毎日の「主任会議」で方向性を確認したり、教務主任・学年主任には「打ち合わせ」をタイムリーに行うよう協力を求めたりしていたところでした。

さて、先日、県教委による令和２年度「働き方改革に関する教職員へのアンケート調査結果」に触れる機会がありました。その調査結果の１つに「疲労感や焦燥感を感じる」業務として、「会議・打ち合わせ」が令和元年は１位、令和２年は２位と高かったことに複雑な思いになってしまいました。

思えば確かに、職員の中には他の業務と天秤にかけ、管理職の思いとは別に、「共通理解と対策の立案」である会議や打ち合わせから遠ざかる先生、目もうつろな先生方も少なくなかったと思います。

そこで、会議の充実のために、日頃の学級活動で工夫されている先生や、研修に行った先生方に事前にテーマを設けて、ひきつける話をしてもらったり、また、会議で提案された内容について学年ごとや教科ごとに話し合いの場を設けたりしながら、学校経営に主体的になっていくように、少しだけ工夫してきたように思います。発表者に対して質問や感想、評価や拍手があると、場も和み、会議も幾分充実したものになったようにも思いました。

今は「三密を避けて」といわれながらの学校経営です。が、職場の皆さんの気持ちだけは密であって欲しいものです。そして共通理解を図りながら、学習指導、生徒指導、学習環境の整備等を行われ、目の前にいる児童・生徒のために活躍されることを期待しています。

先輩メッセージ

校長会のプライド

福井　信夫　様
（前一関市立一関中学校長）

「校長会のプライド」。校長になったばかりの頃、この言葉を、諸先輩方から何度も聞かされました。

私が初めて校長職を拝命したのは、平成21年４月です。新昇給制度を巡り、県教委の一部と小・中両校長会等が激しく対立し、県内公立学校教職員の大半が反対していると言われる中、制度導入が強行されて間もない時期でした。

運用が始まってしまった新昇給制度について、「職員全体の力で子どもたちを育てる」という学校の本質を踏まえてどう対処すべきかを、地区校長会等で詳しくご指導頂きました。意に反する新昇給制度を、学校現場の思いに少しでも近づけるための動きを通じて、校長たる者、ただ唯々諾々と行動するのではなく、プライドを持ち、少しでも良い方向を目指さなければいけないのだということ、そしてそれを支えるのが校長会であるのだということを一連の動きの中で学ばせて頂いたことを覚えています。

市町村立学校の校長は、それぞれの教育長の部下ですので、教育長からの指示があれば、そのとおりに行動することが筋です。しかし、単純な行政機関ではない学校現場の長である以上、その信念や良心に照らして譲れないものは存在します。一人ではその判断に自信を持てないことも多いですが、校長同士で意見を交換し、知恵を出し合い、行動につなげる。それが校長会の存在意義の一つであり、そうやって練り上げたものが、校長会のプライドとして全体の行動基準になっていくのではないでしょうか。

昨年度は、校長会で重い役職を頂きましたが、判断に迷った時、いつも思い出した言葉は「校長会のプライド」でした。今、自分は校長会のプライドを損なうことなく行動できているか、いつも自問自答していたように思います。コロナ禍など、判断の難しい中、校長会の皆様がプライドに基づき対応されている様子を見聞きし、有り難く思っているところです。皆様方の益々のご活躍をご祈念申し上げます。

私の学校経営

併設の支援学校との「支え合い」

遠野地区　小向　敏夫（遠野中）

開校から８年目の今年、思い切って学校目標を変えました。目標は、教職員のものだけではなく、生徒、保護者、地域と共有するものでなければならないと考え、学校教育目標を学校目標としました。そして、生徒の意見も聞いて、学校目標を「知性を磨き　支え合い　未来を拓く遠中生」としました。

本校の生徒355名は、同じ校舎で花巻清風支援学校遠野分教室中学部の生徒７名と一緒に学校生活を送っています。お互いの生徒にとって、それがとてもいい教育環境であると日々感じています。生徒どうしが互いに支え合い、協力し合って伸び伸びと学習し、成長しています。その良さを学校経営の柱にしたいと考えたことも学校目標を変えた理由です。「支え合い」という言葉をどうしても入れたかったのです。

コロナ禍で予定されていた行事等が制限される中、分教室との交流はより深くなったように感じます。儀式的行事は勿論、運動会、文化祭も一緒に行っています。運動会では、組団にも所属し、応援合戦や組団活動にも参加しました。全校合唱、学年合唱も一緒に行います。修学旅行、市外研修も合同で実施する計画を進めています。

今年は、生徒会活動への分教室の生徒の参加機会も増やしました。主なものとして①新入生歓迎会での自己紹介②準会員としての生徒総会への参加③専門委員会の委員としての活動に参加（保健、図書、文化、福祉、美化委員としての活動）などです。

合唱部や吹奏楽部のミニコンサートを分教室の生徒が聴き、分教室の生徒のミュージックベルの発表会には本校の生徒の多くが集まりました。箏や浴衣の着付け教室など、外部講師を招いての授業では、共同学習を行っています。

生徒どうしが交流を深めることで、理解し、思いやりの心が育ち、共生社会の実現につながる教育活動が営まれていると日々実感しています。

新任校長の抱負

新たな船出に向けて

紫波地区　坂本　　大（紫波第二中）

15年ほど前に本校に勤務した経験があり、生徒会担当として体育祭をスタートさせたり、研究主任として文部科学省指定の学校公開に対応したりと、とても思い出深い学校です。当時も今も変わらず素直で明るい生徒が多く、保護者の方々や地域の皆様に大切に育てられていることを実感します。ただ、当時250名ほど在籍していた生徒も、今年度は119名と半数以下になってしまったことに、時代の流れを感じずにはいられません。

新任校長として赴任して間もなく半年、新型コロナウイルス対策の影響により、様々な行事を中止もしくは延期せざるを得ない状況になりました。そのような中でも、教室の密状態を避けるために学級を分割して対応したリモート形式の授業や、体育祭の代替として行った生徒会企画のスポーツ行事等、生徒も教職員も新しい生活様式の中で前向きに取り組んでいます。

本校の学区には５つの小学校があり、その全てが複式学級を有する小規模校です。令和４年度には、この５つの小学校が統合し、本校と共に施設一体型小中一貫教育校「紫波東学園」に生まれ変わります。４月より新任校長としての職責の重さを実感する一方、開校に向けた準備作業に追われる毎日です。現在は９月からの建築工事に係る打ち合わせ、小中一貫教育校における学校経営の在り方の検討や教育課程の編成、学校運営協議会制度導入の検討とやるべきことは見えているものの、その具体については五里霧中の状況です。

しかし、コロナ禍での対応と同様に、今できること、やらなければならいことをしっかり見極め、予測不可能な未来に生きる子供たちの資質・能力の育成を第一に据えた学校経営を目指し着実に前進して参ります。そして、新たな学園の開校に向けた歩みが、生徒、保護者、全ての関係者の期待と喜びにつながるよう奮闘努力して参る所存です。

新任校長の抱負

「チーム有住」の一員として

気仙地区　岩角　聖孝（有住中）

３月の職務引き継ぎにおいて、前任の三浦政勝校長先生は、開口一番、「有住中学校は、岩手県内の中学校で一番素晴らしい学校です。」と話されました。

４月に着任して以来、「素直で何事にも真面目に、ひたむきに取り組む生徒」、「生徒のために労を厭わず、意欲と明るさを持って、熱心に職務にあたる教職員」、「結束が固く、全面的に協力していただける保護者や地域の方々」の姿を目の当たりにして、前任者の言葉通り、素晴らしい学校に赴任することができた喜びと感激を噛みしめるとともに、身の引き締まる思いで１学期を過ごしてきました。

本校は、「学校教育目標」や「目指す生徒像」、生徒会が制定した「教育遺産宣言」において、「体力向上・健康安全」を第一に掲げ、「チーム有住」として全員がひとつになって活動することをモットーに今まで学校経営を推進してきました。その成果は、毎日カップ中学校体力つくりコンテスト最優秀賞獲得、陸上競技400M日本一選手輩出、全国駅伝大会２度出場等、枚挙にいとまがありません。現在、全校生徒は33名であり、歴代最少人数となりましたが、生徒たちは今までの歴史と伝統をしっかりと引き継いでいます。

近年は、さらに総合的な人間力の向上の場と捉えて体力つくりに励むほか、「社会的実践力を身につけた心豊かな人材」を育成するために「地域創造学」にも取り組んでいます。「地域創造学」は、本町独自の先進的な教育課程であり、この「地域創造学」の実践を深め高めることは、生徒・教職員・保護者・地域が一体となって、共に成長することにつながると考えています。

諸先輩方が脈々と築き上げてきた伝統をしっかりと引き継ぐとともに、「チーム有住」の一員として、有住中学校の生徒の「体・知・徳」の伸長のために、そして、地域社会の更なる発展のために、精一杯頑張りたいと思います。

各地区校長会活動 NOW

花巻地区校長会

会員相互の連携を通し、危機を乗り越える学校経営を目指して

中村　哲（南城中）

1　はじめに

花巻地区校長会中学校部会は、花巻市内11校で構成され、中学校における諸課題への迅速且つ適切な取組が可能となるよう連携を図り、学校経営の充実に寄与する組織づくりを目指している。特にも今年度は、新型コロナウイルス感染症対策について、校長が各学校でリーダーシップを発揮して対応できるよう、協力体制の構築を例年以上に推進している。

2　本年度の活動方針

(1)　教育専門職としての研修に努める。

(2)　当面する教育諸課題に対し、協力して課題解決に努めるため、情報交流を活発にし、会員相互の連携を図る。

(3)　関係機関･団体と連携し、教育諸条件の整備･改善に努める。

3　主な活動内容

(1)　第57回岩手県小・中学校長研究大会花巻大会の開催中止に伴う「大会研究報告」の作成と学校経営研修会（講演会）の開催

(2)　市学校サイボウズを用いて、新型コロナウイルス感染症対策等、細かな学校毎の状況や対応に関する情報交換の実施

(3)　加配職員の配置やＩＣＴ等教育環境整備に係わる要望書の作成

4　おわりに

今年度は、教育課程や学校行事等、学校教育で行うべき大事な要素が変更を余儀なくされている。地区校長会では会員相互の連携を深め、協力体制を構築してこの危機を乗り越えられるよう、活動を推進していきたい。

宮古地区校長会

会員間の連携と情報交換を密に

三浦　政勝（花輪中）

1　はじめに

宮古地区校長会中学校部会は、宮古市11校、山田町１校、岩泉町４校、田野畑村１校の17校で構成されています。会員間の連携と相互の情報交換を密にしながら、よりよい学校経営を展開するために活動しています。

2　本年度の活動方針

(1)　第一に会員間の連携と情報交換を密にする。

(2)　現代的な教育課題に関する研修を深め、学校経営の改善と発展に資する。

(3)　常に生徒・保護者・地域住民と一体となった教育活動を重視する。

(4)　関係機関や教育団体（市町村教委・小学校部会・高等学校等）との連携・協力を図る。

3　本年度の主な活動

(1)　総会・研修会・研究発表会・研究集録作成

(2)　学校経営にかかわる研究推進

「　不適応生徒への効果的な支援の在り方　」

～　望ましい校内体制構築のため、リーダーに何が求められ、何をすべきか　～

(3)　部会研修・情報交換・中高連携

各種会議や研修会の後には、常に校内行事や部活動の在り方等､情報交換をしています。

(4)　県中学校長会「被災地訪問」への対応

８月６日に県中学校長会役員の皆様を迎えて、被災地の現状や復興教育の推進、県への要望等を伝える機会となりました。

4　おわりに

今年度は､特に新型コロナ感染症防止に関わり、例年通りの学校経営とはいかない場面が多い中、校長には、的確迅速な判断が求められます。そんな時にこそ､会員同士の連携･情報交換が役に立っています。私自身、校長経験２校４年目ですが宮古地区の校長会の皆様におおいに助けられています。